

# 青雲の果て

— 武人黒田清隆の戦い —

## 第2回

### 奥田 静夫

フリーライター・開拓史研究家

## 第1章 目覚め（続き）

### 江戸江川塾に入門

清隆は23歳のころ、島津久光に対し洋行することを願い出た。かねての念願をぜひとも実行に移したかった。

幸い久光はこれを許し、ロシアに留学することを命じたので、清隆の喜びようは大変なものであった。

しかしその後、薩摩藩では薩英戦争の経験にかんがみ、洋式操練や砲術修業のために多くの藩士を長崎や江戸に内国留学させることとした。

西洋式砲術や海防で有名な江戸の江川太郎左衛門（英龍）の塾にも、有望な青年たちを送ることとなり、清隆もそのメンバーに選ばれ、大山巖ら仲間10人と一緒に上京することになった。

出発にあたり、西郷隆盛は清隆に対し、「砲技の人となるなかれ。天下の士となるべし」

つまり一砲術家で終わることなく、より大成するようにとの心のこもった言葉を贈り、激励してくれた。この言葉は、何よりも若い清隆の心をとらえた。

結局、清隆のロシア行きは、こうした経緯でなくなったのだが、清隆が江戸で



西郷隆盛肖像（佐藤均画。致道博物館蔵）

多くを学ぶ道は開かれたのだった。

ただ、このときロシアに行っていたら、清隆の人生は、かなり違ったものになっていたであろう。またこのとき以来、彼は終生ロシアへの関心を持ち続けることになる。

江川塾に入ったのは、文久3年（1863）12月のことであった。

当時、江川塾では、創始者で著名な江川太郎左衛門が亡くなり、その子の江川英敏が主宰していた。

のちに榎本軍の陸軍奉行となって、箱館戦争で清隆と砲火を交える大鳥圭介（幕臣）も、この塾の教職にあった一人であり、やほりのちに開拓使などで清隆の配下として活躍することになる鈴木大亮（仙台）や湯地定基（薩摩）も、同じく江川塾で学んでいた。

この塾で、清隆は西洋砲術の理論や実技、軍隊の指揮統率の術などを習得した。彼はもともと剛胆な性格であったが、のちに周囲から、尊攘派屈指の理論家と認められるまでに成長していった。

“刻苦精励”に徹し、夜は丹前一枚をかぶり、机にもたれながら眠った。眠りながらも、頭の中では、たえず西郷の言葉「砲技の人となるなかれ。天下の士となるべし」を反芻していた。

しかし何よりも貴重だったのは、ここに集まる諸藩の逸材と交流したことであった。清隆は、塾生らと議論するだけでは飽き足らず、積極的に外に出て、多くの名士を訪問して議論を戦わせた。

清隆の視野はここで大きく拡がり、やがてのちの清隆の人脈をかたち作っていった。

このころの逸話が残っている。

清隆が同郷の後輩湯地定基・堀基らと街を歩いていたとき、湯地がある貴人の行列の従者とぶつかりそうになった。従者が口汚くののしったので、湯地も怒ってやり返し、あわや両人は抜刀せんばかりになった。

そのとき清隆は湯地をなだめ、相手には腰を低くして、ひたすら詫言（わづ）びた。騒ぎが収まり相手が立ち去ると、清隆は湯地を戒め諭し、そして大笑した。

また、江川塾の教授をつとめていた松井某が独立して私塾を開いたことがあった。

しかしこれに応じて学ぶものがなく、ひどく困

窮しているのを知った清隆は、持ち前の義侠心を発揮し、松井の塾に転じた。

その後、松井は事故で失明して衣食にも困るようになったので、清隆は後年参議（左右大臣に次ぐ重職）に栄進したころ、その母を自邸に引き取り、養ったというのだ。

二年後の慶応元年（1865）9月、清隆は薩摩藩当局に対し、建言書を提出した。

それは「海軍修業奨励に関する建言書」といわれるもので、「艦船の数ばかり多くても、それを運用できる人がいなければ無用の長物と化してしまう。機械はいつでも購入できるが、人は急に得ることはむずかしい。よって門閥子弟を中心に人材を養成し、江戸、長崎のみならず、外国までも留学させて海外事情を知らしめ、海軍を興して尊王攘夷の実をあげるべきだ」

というのが、その主旨であった。軍についての関心は、人一倍強かった。

翌10月、同じ江戸留学仲間だった木藤市助ら二、三の者が海外への密航留学を志願した。

藩当局では、この年3月、すでに19人もの留学生をイギリスに派遣していたが、翌慶応2年初め、イギリス、アメリカ、フランスの3カ国に3人ずつの留学生派遣を決定した。このうちフランスへの派遣予定者として、清隆の名があがっていた。

しかし、結果として清隆の留学は実現しなかった。

清隆が薩長連合のことで長州との交渉役を引き受け、超多忙な身であったためだった。

## 第2章 薩長連合

### 蛤御門の変に参戦

話がややさかのぼるが、下関事件が起きた直後の文久3年（1863）5月20日、京都で急進的な尊攘派公家の姉小路公知（国事参政）が暗殺された。夜半、御所を退出して朔平門外を通りかかったところを3人の刺客に襲われたものであった。

現場に遺棄されている刀から、薩摩藩士田中新兵衛が町奉行所に連行されたが、新兵衛はその場で自害して果てた。

そのころ、京都は薩摩・長州両藩の兵で固められており、両者は主導権をめぐって暗闘していた。

このときの暗殺事件の嫌疑が、あろうことか、薩摩藩にかかった。このため薩摩藩は京都への出入りを禁止され、政治的に大きなダメージを蒙った。

長州藩は、この機に乗じて急進派公家の三条実美らを擁し、一挙に朝廷より攘夷親征の詔書を発出させようと画策したが、この企みは、事前に薩摩藩士たちに察知されて失敗し、逆に三条実美、東久世通禧、沢宣嘉ら7人の公家（七卿）は、朝廷により、長州藩士とともに退去を命じられた。（いわゆる「七卿の都落ち」）

こうして京都はたちまち薩摩藩の手中に落ちた。

長州藩は朝廷に対して、七卿及び藩主以下の赦免をたびたび願い出た。

そのうちにたまりかねた福原越後、益田右衛門介、国司信濃ら3家老は、翌年（元治元年）7月19日、長州藩兵3千人を率いて京都に上り、武力解決をはかろうと企てた。

会津藩、桑名藩、薩摩藩などの兵は、直ちにこれを迎え撃った。

清隆は、まだ江川塾生であったが、すぐ上京し、薩摩藩兵として参戦した。とくに蛤御門付近での交戦は熾烈であった（「蛤御門の変」）が、清隆自身は、

「其変を聞き、直に上京、藩兵に従い事を謀る」

としか書き残していない。（「黒田清隆履歴書案」）

結局、その日のうちに長州藩は敗北して「朝敵」となり、薩摩藩はこれを撃退して勝利し得た。

しかし京都の街は3日間にわたって燃え続け、被災は2万8千戸余りに及んだ。逃げ場を失った避難民たちは、鴨の河原にあふれ出た。



甲子兵燹図（京都大学附属図書館蔵）

このときの庶民の罹災状況は、のちに「甲子兵燹図」（前川五嶺作といわれる）という絵巻物にも描かれているが、戦火に巻き込まれた庶民たちは、長州藩に対してばかりでなく薩摩藩、会津藩などに対しても、怨みの視線を向けた。

清隆は、民の苦しみ、内戦の無益さ、列国の介入の恐れなどを痛感した。

（この気持ちを何かに思い切りぶつけたい）

という激しい衝動が、心の中に沸き起こっていた。

この戦いのあと、考え抜いた清隆は、（結局、朝廷を中心にした政治を確立すると同時に、薩長が手を結んで、一致して倒幕に当ることこそが、何より重要だ）

という結論に達した。そして自分が師とも仰ぐ西郷隆盛や周辺にも、この考えを説くようになった。前記履歴書案には、このあたりのことを、「於是私かに顧う、将に王室を興復し皇威を光張せんと。而して兵を国内に結ぶ良計に非ず。宜しく薩長一致して事を済す可しと。乃ち西郷吉之助等に説くに其意を以てす。衆皆以て然りとす」と記している。

### 薩長連合に奔走

蛤御門の変のあと、幕府はいわゆる「第一次長州征伐」を企てたが、長州藩はひたすら恭順の姿勢をとり、戦争の責任者として福原越後ら三家老を切腹させて、事態収拾をはかった。

その後、長州藩では木戸孝允（桂小五郎）、高杉晋作、伊藤博文（俊介）、山県有朋（狂介）らが実権を握った。

彼らは、列国との戦闘経験から攘夷の不可能さを知り、「倒幕」に力を注ぐ方向に政策転換した。

このころ、長州藩を敗北に追いやったはずの薩摩藩でも、たまたま同様の結論に達し、藩の実権は、久光から小松帯刀、西郷隆盛、大久保利通らの反幕府開明派の手に移っていった。

一方、土佐の浪士坂本龍馬、中岡慎太郎らは、幕府に代わる新政権を樹立するため、長州藩と、これに敵対していた薩摩藩とを連携させ、いわゆる「薩長連合」を成立させようと考えていた。

彼らはこの構想を実現するため、慶応元年（1865）5月、長州の木戸孝允、薩摩の西郷隆盛

による実力者会談を実現させようと動いたが、まだ機が熟さず、このころみは、まとまらなかった。

ちょうどそのころ、清隆も前述したように、薩長連合の成立がぜひとも必要だと考えていた。

西郷の補佐役をつとめていた清隆は、その年の秋、神戸（兵庫）に来た坂本龍馬に会い、たがいに腹を割って意見を交換した。

その結果、2人は、もう一度薩長実力者のトップ会談を実現させることで、意見が一致した。

清隆は、早速坂本を西郷隆盛に引き合わせて、具体的な打ち合わせをした。

いよいよ手はずが決まり、路銀のことに話が及んだところ、清隆は懐中に納めていた金子を取り出し、両人の目の前に置いて、「こういう火急のこともあろうかと、かねがね準備しておき申した」

といった。

この心遣いには、坂本も大いに感銘を受けたようであった。

12月の初め、清隆は西郷の命を受け、坂本と連れ立って長州に出発した。

下関に着くと、坂本を宿にとどめ、すぐ薩摩藩の使者として長州藩の高杉晋作らとの予備交渉を行なった。

幸い、旧知の長州藩士品川弥二郎を介して木戸孝允と面会することに成功、早速交渉を始めた。

木戸は清隆の話に耳を傾けたが、当初から、（長州藩の薩摩藩に対する積年のわだかまりを、一挙に水に流して和解するのはむずかしい）

と考えていた。薩長は、いわば“仇同士”であり、蛤御門の変以来、多くの仲間を討たれた長州藩士の薩摩藩に対する怨みは根深く、下駄に「薩賊会奸」と書いて踏んで歩くほどであった。

しかし木戸の側近の高杉晋作、井上馨（聞多）ら若手は、熱心に薩長の提携を勧



木戸孝允（港区立港郷土資料館蔵）

めた。

清隆は、坂本に対し、ころあいをみて木戸を説得するよう頼んだ。

坂本はこれに応じて、側面から独特の弁舌を駆使して説得を行った。

こうして、ついに長州藩主毛利敬親が、木戸に対して京都出張を命ずるところまで、漕ぎ着けた。

暮れも押しずまった12月27日、木戸の一行は長州三田尻を出発して大坂に向かった。

清隆も木戸を護衛して同行し、ほかにも長州藩の奇兵隊長三好軍太郎（重臣）、遊撃隊長早川渡、御楯隊長品川弥二郎、土佐藩の田中光顕などがこれにつきしたがった。

一行は船で播磨に向かい、そこから皆、偽名を使って薩摩船に乗り移り、密かに大阪に潜入した。

木戸の手記（「木戸孝允文書」）には、  
「十二月薩黒田了介（清隆）余を尋ねて馬関に至る。談話一日切に余に上京を促す。此時坂本良馬（龍馬）亦来て馬関に在り。又頻に黒田と共に上京することを論ず。而して余白面京都に至り薩人と面会するに忍びず。故に他人をして上京せしめんとす。而も高杉晋作、井上聞多等亦余をして上京せしむる事を論じ、公命下るに至る。依て余恥を忍び意を決して…黒田了介（清隆）と同船浪華に至る。千時正月四日也」

とあり、渋る木戸を京都入りさせるための説得工作で、いかに清隆が苦勞し、大役を果たしたかがわかる。

一行は船中であわただしい新年（慶応2年）を迎え、1月8日、京都に到着した。

薩摩藩の実力者西郷隆盛は、伏見で木戸を出迎えた。木戸と西郷が初めて顔を合わせた瞬間であった。

西郷の態度は、丁重そのもので、これが西郷の薩長同盟にかける期待の大きさをあらわしていた。

このあと二人は薩摩藩邸で話し合いに入った。木戸は薩摩の西郷、小松帯刀、大久保利通らと意見を交わしつつ、数日を過ごした。

しかし双方とも慎重を期す余り、相手の顔色をうかがい、なかなか自分の方から本音を切り出さなかった。

10数日経ち、木戸はとうとう望みを失いかけて、行李をまとめ始めた。

清隆がことの成り行きを心配しながら様子を窺っていたところ、たまたま坂本龍馬が京都入りしてきた。

坂本は、清隆らの意を受けて、18日、熱心に両者の間を取り持った。

こうして入京2週間後の21日、小松帯刀の屋敷において、木戸と西郷らとの間で薩長連合の密約が結ばれた。

それは次の6カ条からなる攻守同盟（いわゆる「薩長同盟」）であった。

第一に、幕府と長州が開戦したら、薩摩は兵を京都、大坂に派遣して、幕府を牽制する。

第二に、長州が勝てば、薩摩は直ちに朝廷に達し、長州の汚名をそそぐ。

第三に、長州が負け色になっても、一年や半年で壊滅しないので、その間に薩摩は尽力する。

第四に、幕府が戦争を回避した場合、薩摩は朝廷に工作して長州の冤罪を晴らす。

第五に、幕府や一橋、会津、桑名が四項を妨害すれば、断乎決戦に及ぶ。

第六に、双方、皇国のため、誠心を尽くして働く。

つまり、当面の目的は、幕府から討伐されようとしている長州藩を援助することとし、究極の目的を、

「（薩長）双方皇国之御為、皇威相輝き御回復に立ち至り候を目途に、誠心を尽して尽力可致の事」として、たがいに誓い合ったものであった。

坂本はこれに、  
「龍等も同席にて談論せし所にて毛頭相違これなく…神明の知る所に御座候」

と裏書した。

清隆の念願であった薩長連合は、ここに実現した。このとき清隆は25歳であった。

## profile

奥田 静夫 おくだしずお

1943年福井県生まれ。金沢大学法文卒。北海道開発局官房長、(社)北海道建設業協会専務理事を経て、フリーライター・開拓史研究家。一道塾会員。札幌市在住。2006年3月、「魂を燃焼し尽くした男—松本十郎の生涯」で第26回北海道ノンフィクション大賞受賞（雑誌「クオリティ」同年4～12月号連載）。